

農作物技術情報 第5号 水稻

発行日 令和6年7月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 県全体の出穂期は平年より2日早い7月31日頃と見込まれます（7月21日現在予測）。生育ステージを確認しつつ、気象の変化に応じた栽培管理、防除を心掛けましょう。
- ◆ 向こう1か月の平均気温は平年に比べ高くなる予報であり※、登熟前半は平年に比べ高温で推移する可能性が高いです。出穂後20日間の最高気温が30℃以上、最低気温が23℃以上の場合、胴割粒・白未熟粒が発生し品質が低下するおそれがありますので、登熟期の高温に対応した水管理（間断かんがい、夜間入水など）を徹底しましょう。
- ◆ 斑点米カメムシ類の被害多発が予想されます。穂揃期1週間後の薬剤防除を徹底しましょう。
- ◆ 穂いもちの発生に注意が必要です。予防剤の散布の有無に関わらず、上位葉に病斑を確認した場合は、ただちに茎葉散布による防除を実施しましょう。

※ 東北地方1か月予報（令和6年7月18日発表，仙台管区气象台）

1 水稻の生育状況と出穂期の予測

- ・ 農業改良普及センター生育診断予察圃の幼穂形成期は県全体で7月9日頃（平年差-2日）となっており、本報の作成時点（7月21日）の予測では、出穂期は平年より2日早い7月31日頃と見込まれます（表1）。
- ・ 今後の栽培管理や防除にあたっては、例年どおりの暦に頼らず、実際の出穂状況をよく観察したうえで、適期を逃さないよう実施します。

表1 出穂期予測（農業改良普及センター生育診断予察圃）

	地帯名					品種名				
	県全体	北上川 上流	北上川 下流	東 部	北 部	ひとめ ぼれ	あきた こまち	いわて っこ	銀河の しずく	金色 の風
本年（予測）	7/31	8/2	7/31	7/29	7/28	7/29	8/2	7/30	7/30	8/2
平年	8/2	8/2	8/1	8/1	8/3	8/2	8/1	8/2	8/1	8/2
差（日）	-2	0	-1	-3	-6	-4	1	-3	-2	0

1) 出穂期：幼穂形成期の2024年実測値から、発育指数（DVI）とアメダス日平均気温を用いた予測式により推定。

⇒日平均気温は予測日（7/20）より前の期間は現況値、予測日以降は平年値を使用。

2) 県全体の数字は、各地帯の作付面積比による加重平均。

3) 生育診断予察圃における実測・予測結果であり、一般圃場とは移植時期や栽培管理の内容によって変動しうる。

2 登熟を低下させない水管理

(1) 出穂・開花期の水管理

この時期は、生育の速度が早く大量の水を必要とします。過乾燥は、穂の出すくみや開花・受精障害による不稔の発生を招くことがあるため、**湛水管理**（浅水でよい）を基本とします。

(2) 登熟期の水管理

向こう1か月の平均気温は平年に比べ高くなる予報であり、**登熟前半は平年に比べ高温で推移**することが予想されます。

登熟前半に高温（日中30℃以上、夜間23℃以上）が続く場合、登熟不良や玄米品質の低下（胴割粒や白未熟粒の発生）を招く恐れがありますので、かんがい水の状況に応じて以下の管理を実施してください。

① かんがい水を確保できる場合

- ・ **間断かんがい**を基本とし、湛水2～3日→落水1～2日程度とするなど、**水の入替頻度を高めて、水温・地温を下げる**とともに、根に酸素を与えて活力維持をはかります。
- ・ 間断かんがい中の管理の目安
湛水時・・・**水深3cm程度**
落水時・・・**滞水部が消失し、土の湿り気を目視及び触れて確認できる程度まで。**
(土壤表面の白化・亀裂が広がるほどの**過乾燥にはしない**)
- ・ **入水は夜間**に行います（水尻を止めて夕方から朝まで入水→その後、自然減水）。
- ・ 常時湛水管理は、根腐れや稲体の消耗をまねき、スムーズな登熟を阻害するので避けてください。

② 十分なかんがい水を確保できない場合

- ・ 間断かんがいを実施できない場合は、**土壤を常に湿潤状態（足跡に水が少したまる程度の状態）**に保ちます（図1）。
- ・ 土壤の乾燥は品質低下につながるため、実施には十分に注意してください。
(水持ちの悪い圃場などは特に注意)



図1 足跡に水が少したまる程度の状態

(3) 落水時期

- ・ 落水時期の目安は、**排水良好な水田で出穂後35～40日、排水不良田で30～35日**です。
- ・ 近年、登熟期間の早い段階から落水し、田面を乾燥させている圃場が増えています。極端な早期落水は腹白粒増加や千粒重低下、胴割粒発生の原因となるので避けてください。
- ・ また、直播栽培など、登熟の早い段階で用水の利用期間が終了する場合も、乾かしすぎに注意し、落水の目安時期まで水尻は閉じたままとしてください。

3 病害虫防除対策

(1) 斑点米カメムシ類・・・発生量「多」の予報

[令和6年度病害虫発生予察情報 注意報第1号(県病害虫防除所 令和6年7月16日発行)]

ア 薬剤防除(茎葉散布で行う場合)の適期は、穂揃期1週間後です。

地域一斉防除を行う場合の散布時期は、地域の圃場の半数が穂揃期に達してから1週間後を目安とします。



図2 出穂の様子



図3 穂揃期(ひとめぼれ)

※8~9割の茎で出穂、穂首はまだ完全抽出していない

- ・穂の先端(芒を除く)が少しでも抽出した状態を“出穂”といいます(図2)。
- ・出穂した茎の割合が40~50%の状態を「出穂期」、80~90%の状態を「穂揃期」(図3)といいます。

イ 被害多発の恐れがある場合(下記①②③)は穂揃期2週間後に薬剤を追加散布します。

[穂揃期1週間後にジノテフラン剤を用いた場合、追加散布は穂揃期3週間後とします]

- ① 近隣に出穂開花中のイネ科植物(特にイタリアンライグラス)を含んだ牧草地や雑草の繁茂地等があり、斑点米カメムシ類の発生密度が高いところ。
- ② 本田内にノビエ、イヌホタルイ、シズイなどの雑草が多発しているところ。
- ③ 割れ粳の出やすい品種(あきたこまち等)を作付けしているところ。



図4 シズイの花穂とアカスジカスミカメ成虫



図5 割れ粳と斑点米(矢印)

ウ 水稻出穂間際の草刈りは、カメムシを本田に追い込むので避けます。

草刈りを適期(水稻出穂15~10日前まで)に実施できなかった場合は、本田の薬剤散布(穂揃期1週間後)の後、1週間以内に草刈りしてください。

(2) 穂いもち・・・発生量「やや少」の予報

[令和6年度病害虫発生予察情報 発生予報第4号 (県病害虫防除所 令和6年6月27日発行)]

ア 穂いもち防除は、出穂前の予防粒剤の施用、または出穂直前と穂揃期の2回の茎葉散布を基本とします。

イ 穂いもちの発生が多いと予想される場合は、以下の防除を行います。

- ・ 出穂後に降雨が続いたり、低温等で出穂期間が長引く場合は、出穂直前から穂揃期1週間後まで、7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施します。
- ・ 穂いもちが上位葉で多発している場合は、確認時に直ちに防除を開始し、穂揃期1週間後まで7～10日間隔で茎葉散布による防除を実施します。



図6 穂いもち病斑（左：急性型、右：慢性型）

(3) 紋枯病・・・発生量「やや多」の予報

[令和6年度病害虫発生予察情報 発生予報第4号 (県病害虫防除所 令和6年6月27日発行)]

茎葉散布による防除は、穂ばらみ末期（7月末～8月上旬）に、畦畔際の発病株の割合（発病株率）が、早生品種で15%以上、晩生品種20%以上の場合に行います。



図7 紋枯病

農薬の安全使用

- ・ 農薬は使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任をもって使用してください。
- ・ 他の作物に農薬が飛散しないよう注意して散布してください。
- ・ 養蜂（ミツバチ）への配慮
養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危被害防止を徹底してください。

4 刈取りに向けた準備

- (1) 7月21日現在での予測では、出穂期は平年より2日早いと見込まれるため、刈取り適期も平年より早まる可能性があります。
- (2) 出穂は年々早まるとともに刈取り適期も早まっていますが、実際の刈取り時期は早まっておらず、刈遅れの傾向がみられています。このため、近年は高温登熟と刈遅れを原因とした胴割粒や白未熟粒の発生などによる品質低下が問題となっています。
- (3) 今後の気象経過及び長期予報に注意し、積算温度等の目安(表2)をみながら、早い段階から刈取り時期の見通しを立てるとともに、乾燥調製施設の運用が円滑に行われるよう、稼働計画の策定や設備点検などの準備を進めておきます。

表2 刈取り適期の目安(日平均気温の積算)

品 種 名	刈取適期(出穂後積算気温)
金色の風	950~1,050℃
銀河のしずく	950~1,050℃
ひとめぼれ	900~1,050℃
あきたこまち	950~1,100℃
どんびしゃり	950~1,050℃
かけはし	950~1,050℃
いわてっこ	950~1,050℃
ササニシキ	1,000~1,150℃
ヒメノモチ	950~1,050℃
もち美人	950~1,050℃

次号は8月29日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

6月1日~8月31日は
農薬危害防止運動期間です

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 畑作物

発行日 令和6年7月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 大豆 集中豪雨や台風に備え、明渠や排水溝等の点検整備を行いましょう。
7月下旬から開花期を迎え、開花期以降は水分要求量が大きくなります。乾燥が続くと減収することもありますので、干ばつ時にはかん水を行いましょう。
圃場の様子を確認し、病虫害防除を適切に行いましょう。
- ◆ 小麦 次期作に向け、かび毒汚染の防止・低減に努めましょう。また、排水対策等、早めに圃場準備を進めましょう。

大豆

1 生育概況

気温、日照時間も平年を上回って経過したことから生育は順調です。ただし、干ばつ傾向にあった圃場では生育は緩慢に進んだほか、7月上旬の大雨などで滞水した圃場では生育の停滞が見られています。

2 今後の圃場管理

(1) 排水対策

集中豪雨による冠水・浸水被害や湿害を避けるため、畦溝と排水溝を連結するとともに、明渠や水尻にゴミなどの詰まりや崩れがないか確認します。また、排水口（フリードレン下部）の高さを確認し、圃場内排水を促すようしっかり掘り下げてください。

(2) 高温対策（開花期以降の水管理）

大豆は開花期を過ぎると多量の水分を必要とし、乾燥が続くと減収することもあります。干ばつ時には、明渠やうね間を利用したかん水の実施について検討してください。

ア かん水実施の目安

- ①晴天が1週間以上続き、土が白く乾燥している。
- ②日中に葉が立ち、半分以上の葉で裏面が見られる。

イ 実施出来る条件

- ①水回りが良好であること（培土などでうね間があること、圃場の隅に水が溜らないこと等）
- ②漏水が小さいこと
- ③排水溝が設置されていること

ウ 具体的な方法

- ①朝夕の涼しい時間帯に、水を圃場へ入れる。
（水回りの状況を確認、暗渠は閉じること！）
- ②うね間に水が行き渡ったら速やかに排水する。
（滞水すると湿害が発生します。）
- ③区画が大きい場合は数日に分けて徐々にかん水を行う。



写真1 乾燥が続き、葉が立った様子（ほ場全体が白っぽく見える）

【令和5年産大豆の障害粒（「莢ずれ粒」等）の発生について】

令和5年産大豆では、不定形裂皮粒や莢ずれ粒（着色を伴う不定形裂皮）といった障害粒の発生が多く、県中南部を中心に発生が目立ちました。莢ずれ粒の発生機構は解明されていませんが、主に子実肥大期の早い時期における**高温・干ばつ**といった気象条件が影響していると考えられています。



3 病害虫防除

(1) ウコンノメイガ

ウコンノメイガの成虫は葉の裏に産卵し、ふ化した幼虫が葉を巻いて食害します。

圃場をよく観察し、多発の徴候がみられたら、直ちに防除を行います。また、ウコンノメイガは、葉色の濃い品種や生育が旺盛な圃場で多発する傾向がありますので、重点的に観察してください。



写真2 ウコンノメイガ若齢幼虫による食害（葉巻）

○防除の目安

7月第6半旬に一茎あたりの葉巻が3個以上見られる場合は防除が必要です。8月5日頃までに薬剤防除を実施してください。

(2) マメシクイガ

マメシクイガは日長に反応して羽化するため、毎年同じ時期に発生するという特徴があり、8～9月に羽化した成虫が、粒の肥大が始まった大豆の莢に1粒ずつ産卵し、ふ化した幼虫が子実を食害して、収量・品質を低下させます。



写真3 マメシクイガ幼虫による子実の食害

ア 防除適期

県央、県南地域の場合、産卵盛期が9月第1半旬となるため、有機リン剤では9月第1半旬、合成ピレスロイド剤では8月第6半旬、ジアミド剤では8月第4半旬から第6半旬が防除適期となります（表1）。

なお、**県北地域**では、8月第6半旬が産卵盛期となるので、**防除適期もそれぞれ1半旬早まります。**

表1 各薬剤の最も防除効果が得られる時期（県央・県南地域） ※県北地域は、産卵盛期、防除適期ともに各々1半旬早まります。

薬剤名 (商品名)	系統名	8月						9月			
		半旬	2	3	4	5	6	1	2	3	4
M E P 乳 剤 (スミチオン乳剤)	有機リン剤							◎	○		
エトフェンプロックス乳剤 (トレボン乳剤)	合成ピレスロ イド剤				○	◎	○				
ベルメトリン乳剤 (アディオン乳剤)					○	◎	○				
クロラントラニリプロール 水 和 剤 (プレバソフアブル5)	ジアミド剤				◎	◎	◎	○			

マメシクイガ発生消長(北上)
— : 成虫 ↓ : 産卵盛期(推測)

防除効果の評価 ◎ : 最も効果のある防除時期 ○ : 効果のある防除時期

※平成26年度岩手県農業研究センター試験研究成果書「大豆害虫マメシクイガに対する各薬剤の防除適期」より。

イ 耕種的防除

マメシクイガは、連作を繰り返すと発生密度が徐々に高まり被害が多くなります。水田転換畑でも3年以上の連作とならないよう、水稲などとの輪作を実施して、発生密度の低減に努めてください。

(3) 紫斑病

8月下旬以降で気温が20℃付近にあり、降雨が続いた場合に感染します。若莢期～子実肥大期に薬剤が莢によく付着するよう散布することが防除のポイントです。

ア 防除適期

- ・ 1回防除の場合：開花期から25～35日後の間
- ・ 2回防除の場合：若莢期（開花期20日後頃）～子実肥大期（開花期40日後頃）の間に2回散布（散布間隔は10日程度）

イ マメシクイガとの同時防除の注意点

マメシクイガの防除時期は年次変動が比較的小さいのに対し、紫斑病の防除適期である若莢期～子実肥大期は、大豆の生育状況や天候などの影響で変動することがあります。このため、マメシクイガの防除適期と紫斑病の防除適期が重なるかを確認し、薬剤の特徴などを総合的に勘案した上で防除時期や薬剤などを決定してください。

ウ 耐性菌発生防止

QoI 剤、DMI 剤、ピリダジン類は、耐性菌の発生リスクが高いため、2～3年に1回の使用にとどめる。

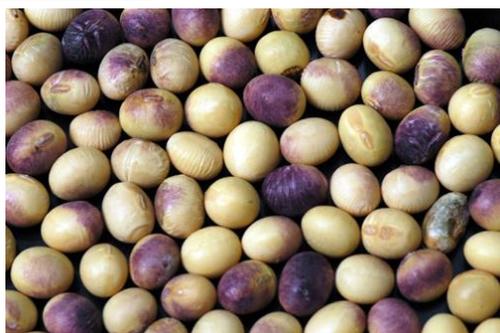


写真4 紫斑粒



写真5 紫斑病罹病株

小麦

1 R6年産の振り返り

赤かび病発生が多かった圃場では、水稲や他品目との輪作をします。適期防除、適期収穫できるよう計画的な作付けを行います。

2 次年度に向けたかび毒汚染の防止・低減のために

(1) 品種の選択

本県の奨励品種から、赤かび病抵抗性が比較的強い品種を選択します。

(2) ほ場の選択

排水性の良いほ場を選択するほか、前作作物の影響を考慮します。

ア 赤かび病の感染源

赤かび病の伝染源は、土壌表面の作物残さに形成される「子のう殻」です。この「子のう殻」に詰まっている「孢子」が飛散して、麦類の穂に感染します。

赤かび病菌は幅広い作物残さから確認されますが、特にイネ科作物「トウモロコシ、イネ、麦類」やイネ科雑草に多く寄生しています。



写真6 稲残さの地際部に形成された子のう殻



写真7 写真6の拡大図

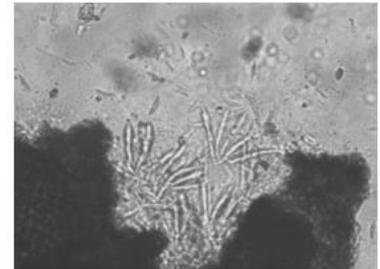


写真8 子のう殻内の子のうと子のう胞子

イ 残さの処理

・輪作

連作により発生リスクが高まりますので、麦類の連作を避け、水稻や他品目との輪作をします。

・残さの処理

前作の作物残さ（稲わら稲株、こぼれ麦等）を早めに土壤中にすき込んだり、ほ場外へ持ち出して地表に残さないことで、赤かび病菌の密度を低下させます。

プラウ耕の実施（前作がトウモロコシでは必須）、またはアップカットロータリーや低速度での耕起を行い、確実なすき込みを実施します。

(3) 土壌改良

酸性土壌や微量元素の欠乏した土壌では、生育が不良となり、赤かび病菌に感染しやすくなるおそれがあるので、土壌診断を行い、十分に生育できる土壌条件を整えることが重要です。

一般に連作圃場では連作年数に比例して地力が低下します。特に固定転作圃場では石灰・苦土が減少し、酸性化が進んでいる圃場が目立ちます。石灰資材などの投入に加え、堆肥の投入や緑肥を利用するなど、積極的に土づくりを行います。

3 小麦作付予定圃場における水稻収穫後の管理

水稻後の小麦作では、連作圃場とは異なり、作業期間の制約などから土壌改良資材や堆肥等の施用が難しくなります。長期的な改良計画を策定し、ローテーションの中で土壌改良・地力向上に取り組んでください。

また、水稻収穫後、スムーズに播種が行えるよう、速やかに溝掘り（額縁明渠）等の排水対策を実施します。なお、連作圃場あるいは固定転作圃場でも排水対策は必須です。

(1) 排水路の点検・補修

確実に排水できるよう、明渠の再施工を行うほか、明渠と排水口を接続するといった補修を行います。また、明渠や排水口周辺の草刈りを徹底します。

(2) 雑草対策

畦畔や明渠の雑草対策（非選択性除草剤の散布）を行い、圃場内部への雑草の侵入を防ぎます。

【資料利用上の注意】

- この資料に掲載している農薬の情報は、令和6年7月22日現在の農薬登録情報に基づいています。
- 農薬は使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任をもって使用してください

（資料作成年月日：令和6年7月22日）

次号は8月29日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 野菜

発行日 令和6年7月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 全 般 遮光などの高温対策とこまめなかん水管理を行う。作業者は水分補給と休憩をとり熱中症にならないよう気をつけましょう。
- ◆ 果菜類【施設】 高温対策、草勢維持、病虫害防除を徹底しましょう。
- ◆ 果菜類【露地】 適切な整枝・摘葉と重要病害に対する初期防除を徹底しましょう。
- ◆ 葉 茎 菜 類 雨よけほうれんそうは、天候の変化に対応した遮光管理と適切なかん水管理・病虫害防除を徹底しましょう。露地葉茎菜類は、適期作業・病虫害防除を徹底しましょう。

1 生育概況

（1）果菜類【施設】

- ・ きゅうりの生育は、概ね平年並です。病虫害では、べと病、アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類の発生が見られています。
- ・ トマトは、一部で着果負担による草勢低下が見られますが概ね順調です。病虫害では、灰色かび病、アザミウマ類が散見され、オオタバコガの発生が多いです。
- ・ ピーマンは、高温期に尻腐果の発生がやや多かった地域もあります。生育は概ね順調です。病虫害では、斑点病、アザミウマ類、アブラムシ類、タバコガ類の発生やウイルス病（CMV等）が見られています。

（2）果菜類【露地】

- ・ きゅうりは、生育が平年よりもやや早く、病虫害ではべと病や炭疽病、オオタバコガ等が散見されています。
- ・ ピーマンの生育は順調です。病虫害では斑点病、灰色かび病、アザミウマ類、タバコガ類の発生が見られています。

（3）葉茎菜類

- ・ 雨よけほうれんそうの生育は概ね順調ですが、病虫害では、萎凋病等の土壌病害、アブラムシ類、アザミウマ類等が発生しています。
- ・ 高冷地キャベツの生育は概ね順調ですが、乾燥の影響による生育のバラツキが見られます。病虫害ではコナガ、ウワバ類の発生が見られます。レタスの生育は概ね順調ですが、すそ枯病、軟腐病、ヨトウムシの発生が見られます。
- ・ ねぎの生育は地域により乾燥による生育停滞がみられたものの、降雨により回復傾向にあります。病虫害ではべと病や葉枯病、ネギアザミウマやネギハモグリバエの発生が見られます。

2 技術対策

（1）果菜類【施設】

施設では、換気や遮光・遮熱等の高温対策を徹底するとともに、少量多回数のかん水と通路散水を行い、葉の蒸散による気化潜熱でハウス内気温の上昇を抑制します。

ア きゅうり

- ・ 早熟作型では、古い葉を摘葉し側枝から発生する健全葉へ切り替えにより、過繁茂による病虫害の発生を防ぎます。

- ・ 抑制作型では、育苗や定植が高温期のため、徒長や日焼け、乾燥対策のための遮光を徹底します。

イ トマト

- ・ 高温期は、午前のかん水だけでは水分不足になりやすいため、午後にもかん水します。
- ・ 摘葉は、収穫後の花房下の葉を摘み、風通しを良好にします。
- ・ 葉かび病の抵抗性品種でも、葉かび病が発生する場合があります。また、すすかび病が発生するので、定期的に防除を行ってください。なお、萎凋性病害も増加する時期なので、萎れが発生した場合は最寄りの指導機関に診断を依頼し、原因を特定して対策を講じてください。
- ・ 害虫では、オオタバコガの被害が出る時期です。発生初期に防除を行ってください。

ウ ピーマン

- ・ 収穫の終わった枝や、内側に伸びた枝により内部が混み合うため、不要な枝は取り除き、内側にも光が当たるようにします。
- ・ 生育量に応じてかん水量を増やすとともに、こまめな追肥を行い草勢維持を図ります。
- ・ 日射の急激な変化や高温により、日焼け果と尻腐果の発生が多くなります。ハウスの換気効率を良くしたり通路やマルチ上にワラを敷くなどした上で、かん水を積極的に行い、地温を低下させ根からの水分吸収を促進します。
- ・ 尻腐果はカルシウム不足が原因ですが、窒素やカリウム等の養分過多が発生を助長します。カルシウム剤の葉面散布を行い被害軽減に努めます。また、高温期の追肥は通常よりもやや薄い濃度で行います。

(2) 果菜類【露地】

8月は収穫最盛期を迎えるため、収穫調製作業に迫われ整枝や摘葉、誘引など栽培管理作業が遅れ気味になりがちです。秋の収量を低下させないためにも、各作業に優先順位をつけて、適期に確実に作業を行います。

ア きゅうり

草勢維持と病虫害の蔓延防止が重要な時期です。

- ・ 老化葉や新しい側枝を覆っている葉・枝の摘葉や整枝、曲がり果や尻太り果などの摘果、定期的な追肥を行い、草勢の維持・回復を図ります。
- ・ 側枝の発生が鈍い場合や草勢が低下している時は、半放任または放任とします。
- ・ 敷きわら等で土壤水分の保持と地温低下を図ります。
- ・ 点滴かん水を行う場合は、少量多回数を基本としてください。
- ・ お盆前は褐斑病や炭そ病、お盆以降はそれらに加えてべと病が増加しやすくなるほか害虫の被害もあるので、病気の葉を積極的に摘葉し、薬剤が十分にかかるようにします。



写真1 整枝管理のイメージ
(混まないように新しい枝葉の発生を促す)

イ ピーマン

- ・ 収穫の終わった枝や、内側に伸びた枝により内部が混み合うため、不要な枝は取り除いて内側にも光が当たるようにします。
- ・ 土壤水分の乾湿の差が大きくと尻腐果の発生を助長するため、定期的なかん水を実施します。また通路に稲わらを敷くなどして、土壤水分の保持・安定化を図ります。また、定期的にカルシウム資材の葉面散布を行い、被害軽減に努めます。
- ・ 追肥は、かん水と同時に行い草勢を維持してください。
- ・ タバコガの発生が始まっています。圃場の成虫の飛来を確認するなど防除が遅れないよう注意します。
- ・ 斑点病の発生が見られるため、被害葉を早期に摘除し薬剤散布を実施してください。

(3) 葉茎菜類の管理

ア 雨よけほうれんそう

- ・ 盛夏期の曇雨天後に強い日差しがあると、葉の萎れや葉焼けが発生します。特に、生育初期は、地温が上昇しやすく、地際部がくびれ倒れる高温障害が発生しやすいので、天候の変化に応じて遮光資材を活用してください。
- ・ 土壌が乾燥するとほうれんそうの生育が停滞するため、かん水は播種時にムラなく十分に行います。
- ・ 生育中のかん水は、本葉3～4枚以降に開始し、土壌の乾燥状態に応じて、涼しい時間帯に複数回に分けてかん水（1回あたり5～10mm）します（写真2）。ただし、トロケの発生を防ぐため、まとまった量のかん水は収穫3～4日前までとします。
- ・ 例年、萎凋病等の土壌病害により減収する圃場では、土壌消毒を実施し、耐病性品種の使用、転炉スラグ施用による土壌pH矯正、適正施肥、残さの適正処理等の総合的な対策を実施してください。
- ・ アブラムシ類、アザミウマ類が発生している場合は、効果の高い薬剤で防除してください。



写真2 生育中のかん水の開始時期（本葉3～4枚）

イ キャベツ・レタス

- ・ この時期は、気温の上昇に伴って発生する株腐病や軟腐病等の腐敗性病害に注意が必要です。防除は、株元まで十分に薬液が届くように行います。
- ・ 害虫の発生にも注意し、定植時から防除を行います。
- ・ キャベツは、コナガやタマナギンウワバが継続して発生するので、圃場をよく観察し、効果の高い薬剤で防除してください。
- ・ レタスは、オオタバコガの発生初期と結球始期からの防除を徹底し、また、8月のヨトウガが発生する時期に同時防除ができるよう、計画的な薬剤の選択をして下さい。
- ・ 圃場が滞水した場合は、乾燥後に畝間の中耕を行って土壌中に空気を送り、必要に応じて液肥を葉面散布して草勢回復を促します。
- ・ これから収穫する作型では、天候により裂球や生理障害の発生が多くなるので、適期収穫に努め、収穫終了後は病害虫の発生源とならないよう速やかに処分してください。



写真3 キャベツの株腐病

ウ ねぎ

- ・ 土寄せは、地上部の生育や葉鞘径の肥大を確認しながら行います。過度に早い土寄せは葉鞘径不足となり軟白部が細いねぎとなります。
- ・ 作型や品種によっては、今が最終土寄せを行う時期となります。土入れを丁寧に行い軟白部と葉の色の境が不鮮明な「ボケ」とならないように、計画的な作業と適期収穫を行います。
- ・ 軟腐病、黒斑病等の重点防除時期になります。また、葉枯病（黄色斑紋病斑）を同時防除できるよう薬剤を選択し、収穫前日数に注意しながら定期的に防除を実施してください。

エ アスパラガス

- ・ 立茎栽培では、株の消耗や茎葉の過繁茂を防ぐため、萌芽してくる若茎を収穫し、弱小茎や曲がった茎は刈り取ります。また、茎枯病、斑点病、アザミウマ類等の発生が懸念されるため、定期防除を行ってください。
- ・ 促成アスパラガスの伏せ込み用根株養成では、生育後半まで肥料成分が残ると茎葉部から根株への円滑な養分転流の妨げになりますので、追肥は8月上旬までに終了させます。また、病害虫の発生には十分注意し、発生状況に応じて薬剤防除を行ってください。

次号は8月29日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 花き

発行日 令和6年7月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 適期収穫と出荷選別を徹底しましょう。
- ◆ 大雨に備えた排水対策を行い、高温乾燥が続く場合はかん水を励行しましょう。
- ◆ 病害虫防除を徹底しましょう。
- ◆ 来年に向けた収穫後管理を適期に行いましょう。

りんどう

1 生育概況

露地栽培の生育は平年よりやや早く、早生種は平年より開花が早まっています。一部、高温障害花の発生が確認されています。

病害虫では、葉枯病、黒斑病、ハダニ類の発生が増加しています。また、オオタバコガ、アザミウマ類、アブラムシ類、リンドウホソハマキの発生がみられています。

2 栽培管理

(1) かん水・排水対策

晴天が続く場合、圃場の乾燥に注意します。かん水を行う場合は、通路かん水を基本としますが、日中高温時に長時間滞水すると、熱水によって株に障害が発生する可能性がありますので、かん水後の土壌浸透時間を考慮して開始時間を決めます。

また、大雨に備え、水路などからの流入水を防ぐため、畦畔の補強、水路の泥やごみの除去を行います。圃場が滞水した場合は、排水路に水が流れやすくなるよう溝切りをして速やかに排水します。

(2) ネット管理

茎の曲がりが生じないように、随時フラワーネットの位置を調整します。また、今後の台風に備え、ネットと支柱を点検・補強します。

(3) 追肥（礼肥）

中生品種までは、収穫後に速効性肥料で窒素、カリ各成分量で3～5kg/10aを施用します。

(4) 残花処理

収穫後の残花は、アザミウマ類、アブラムシ類等の害虫や花腐菌核病の増殖・感染源となります。アブラムシ類はウイルスを伝搬するため、発生すると翌年のウイルス病が増加しやすくなります。花蕾の着いている部分の茎を折り取り（花茎除去）、除去した花茎は放置せず圃場外で処分します。この際、ウイルスの伝染を防ぐため、花茎は手で折り取り、刃物は使わないようにします。



残花処理前



残花処理後（花茎除去）

3 収穫・調製

(1) 収穫・調製

収穫前に各地域の出荷目揃会等で出荷規格を確認し、それに応じた選別、調製を行い出荷します。特に、適切な開花状態（切り前）で出荷できるよう、適期に収穫します。

(2) 鮮度保持

収穫後は日陰で速やかに水揚げを行います。水揚げ容器は、内側にぬめりが生じないようにこまめに洗浄します。また、水揚げに用いる水は飲用可能なものとし毎回交換します。

4 病虫害防除

(1) 黒斑病

発生が増加しています。例年、8月以降に発生が多くなるので注意します。特に、着蕾期になると草勢が衰え、上位葉や側芽、がく片に感染し発病しやすくなります。着蕾期に効果が高い薬剤で防除します。

また、葉の傷口等から容易に感染するため、台風の接近後に感染が拡大した事例があります。治療は困難ですので、有効薬剤による予防散布を継続します。



葉や側芽に発生した黒斑病

(2) 葉枯病

発生が増加しています。中位葉に発生がみられる圃場も確認されていますので、降雨前の予防散布を継続します。また、新植苗で多発すると翌年の生育不良や株の枯死の原因になりますので、採花圃場と同様に定期的に薬剤防除します。

(3) 花腐菌核病

例年、気温が低下し始める8月中旬頃より発生が始まります。このため、猛暑の年は発生が遅くなる傾向です。県の防除情報を参考にし、適期に有効薬剤を散布します。また、この病気は一次感染が着色期以降の花蕾であるため、上述した収穫後の花茎除去が有効な対策となります。

(4) ハダニ類

発生が増加しています。圃場をよく観察し、発生初期の防除を心がけます。下葉の黄化や、葉裏に多数の白色微小斑点・褐色のカスリ状模様がある場合は、ハダニ類の食害による可能性があります。自分で判断が難しい場合は、普及センター等指導機関に相談してください。

また、ハダニ類に薬液が付着しなければ薬剤の効果が得られませんので、葉裏にしっかり薬液がかかるよう、動力噴霧器の圧力を高めにして丁寧に散布します。



葉裏に寄生するナミハダニ



ハダニ類に吸汁された箇所は葉の表から見ると黄化している

(5) アザミウマ類

高温、乾燥で経過すると多発しますので、今後の発生状況に注意が必要です。花蕾の着色に伴い成虫が飛来し増殖しますので、着色しはじめた頃から薬剤防除を開始します。また、収穫しない花蕾を圃場に残すとそこが発生源となり、次に開花する品種に飛来して加害しますので、花蕾の着いている部分を折り取り圃場外で処分します。

小ぎく

1 生育概況

8月咲き品種の開花は、昨年並みで平年よりやや早まっています。圃場や品種により草丈がやや短くなっています。9月咲き品種の生育は平年並で、順調に生育しています。

病害虫では、白さび病、オオタバコガ、ハダニ類の発生が多くなっています。また、べと病、アザミウマ類、アブラムシ類、カメムシ類の発生がみられています。

2 栽培管理

(1) かん水・排水対策

晴天が続く場合は、萎れる前にかん水を行うなど対策を実施します。ただし、小ぎくは高温時の滞水に著しく弱く、根腐れを起こして枯れ上がりしやすいので、高温時のかん水は避けます。大雨後の排水対策も重要で、圃場内が冠水した場合は、溝切り等によって速やかに排水を促します。

(2) ネット管理

りんどうと同様、茎の曲がりが生じないように、随時フラワーネットの位置を調整します。また、今後の台風に備え、ネットと支柱を点検・補強します。

(3) 伏せ込み用親株選抜

株の状態の判断は収穫後では難しくなるため、必ず収穫前に選抜します。開花期が目的とする時期に合っていること、草丈がよく伸び本来の品種特性を備えて揃っていること、葉の枯れ上がりがなく、病虫害（特にウイルス、ウイロイド、土壌伝染性病害）のないことを確認して優良な株を選抜し、目印を付けておきます。

(4) 収穫後管理

伏せ込みに利用する株は、収穫後に地上部が伸びすぎないように地際5～10cmのところまで刈り込みます。その後、速効性の化成肥料を窒素成分量で3kg/10a程度施用します。マルチ栽培では、生育を促すために刈り込みにマルチを除去して土寄せするのが基本ですが、除草労力を考慮して決めます。なお、かき芽で伏せ込む場合は、刈り込みに発生した側枝に土寄せをして側枝の発根を促します。

3 収穫・調製

(1) 収穫・調製

収穫前に各地域の出荷目揃会等で出荷規格を確認し、それに応じた選別、調製を行い出荷します。特に、適切な開花状態（切り前）で出荷できるよう、適期に収穫します。気温が高い時期は収穫後の開花が進みやすいので、切り前に注意します。

(2) 鮮度保持

りんどうと同様に、収穫後は日陰で速やかに水揚げを行います。水揚げ容器は、内側にぬめりが生じないようにこまめに洗浄します。また、水揚げに用いる水は飲用可能なものとし毎回交換します。

4 病虫害防除

(1) 白さび病

発生が増加しています。降雨前の薬剤散布で予防に努めます。病気の有無や収穫の前後にかかわらず、定期的な防除を継続することが重要です。発病後は病気にかかった葉を除去して圃場外に持ち出して処分し、治療効果の高い薬剤を散布します。一般に暑い時期は症状が治まる傾向にありますが、9月の秋雨時期に再び増加するおそれがありますので注意します。

(2) ハダニ類

発生が増加しています。圃場をよく観察し、発生初期の防除を心がけます。ハダニ類に薬剤が付着しなければ薬剤の効果が得られませんので、葉裏にしっかり薬剤がかかるよう、動力噴霧器の圧力を高めにして丁寧に散布します。

(3) オオタバコガ

発生が増加しています。蕾を好んで食害するため、着蕾している品種では注意が必要です。例年、8月以降に発生が増加しますので、圃場をよく観察し早期発見に努めるとともに、各地域の防除暦や防除情報に注意し防除します。



オオタバコガによる蕾の食害

次号は8月29日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 果樹

発行日 令和6年7月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ りんごは花芽形成の時期に入っていますので、誘引や徒長枝の整理を行い、樹幹内部の受光体制を改善しましょう。
- ◆ りんごの果実生育は平年を上回っていますが、着果の多い部分や生育不良果等の摘果を行い、いま一度着果量を見直しましょう。
- ◆ ぶどうは品質向上のため、適切な着果管理を行いましょう。

りんご

1 生育概況

生育診断圃の果実生育（横径）は、7月1日時点の県平均で、「ジョナゴールド」が平年比108%、前年比93%、「ふじ」が平年比115%、前年比98%です（表1）。

本年は、前年とほぼ同等に開花が早いうえ、凍霜害の影響が少なく中心果を利用できたことも相まって、6月1日時点の果実生育は平年比147~165%、前年比105%でしたが、6月の降水量が平年より少ない地点もあり生育はやや鈍化し、現時点では、平年より大きいものの、前年よりやや小さい傾向がみられます。

表1 生育診断圃における果実生育（横径）状況（7月1日現在）（単位:mm）

市町村名	地区	ジョナゴールド				ふじ					
		本年(R6)	平年※4	比	前年(R5)	比	本年(R5)	平年※4	比	前年(R4)	比
岩手県農業研究センター		56.5	48.3	117%	58.6	96%	49.7	43.5	114%	50.4	99%
盛岡市	三ツ割	50.5	46.8	108%	50.5	100%	46.0	41.8	110%	45.9	100%
花巻市	石鳥谷※1	51.7	49.7	104%	59.2	87%	48.6	42.7	114%	51.0	95%
奥州市	江刺樽輪	45.6	46.7	98%	52.8	86%	43.6	43.6	100%	47.1	93%
一関市	狐禅寺※2	49.7	48.4	103%	57.7	86%	45.9	41.8	110%	48.7	94%
陸前高田市	米崎	57.9	48.5	119%	60.4	96%	50.8	43.3	117%	55.6	91%
宮古市	崎山	-	-	-	-	-	56.1	42.7	131%	52.8	106%
二戸市	金田一	52.7	45.2	117%	50.7	104%	50.3	40.7	124%	46.6	108%
県平均値※1(参考)		51.4	47.6	108%	55.2	93%	48.8	42.4	115%	49.7	98%

※1 県平均値に農研センターのデータは含まれていない。

※2 R4年度より定点が変更となったため、平年値は花巻市上根子(前定点)の値を使用。

※3 R2年度より定点が変更となったため、平年値は一関市花泉(前定点)の値を使用。

※4 平年値は昭和60年~令和5年の平均(地点変更時はその年次からの平均)

2 栽培管理のポイント

りんごは、現在、来年の花芽を形成する時期に入っていますが、高温や日照不足の場合、花芽形成は抑制されます。また、多湿条件下では、病害の感染・発生が懸念されます。

花芽形成の促進や病害の発生防止のため、日光や薬剤が樹幹内部まで通るように誘引や徒長枝の整理を行い、受光体制の改善に努めてください。また、着果数の多い部分や生育不良果などの摘果を行い、いま一度着果量を見直しましょう。

りんごの早生品種の収穫では、果実の着色と内部品質が一致しないまま収穫期を迎える場合があります。果肉の硬度や地色の抜けに注意して、収穫が遅れないよう適期収穫に努めてください。

(1) 摘果の見直し、誘引、徒長枝の整理について

仕上げ摘果がほぼ終了し、見直し摘果になります。着果数の多い部分や生育不良果などを摘果します。「ふじ」では、生育不良果のほか、つる割れ果も見えてきますので、随時摘果します。樹体管理では、枝の誘引や支柱立て、徒長枝の間引きなどを行い、樹冠内部への日光や薬剤の通りを良くします。また、台風などに備えて支柱との結束を確認し、園地の排水対策も行います。

(2) 早生種の着色管理

- ア 早生種の葉摘み開始時期は、収穫予定の10～20日前です。
- イ 果そう葉を中心に、最初は軽く2～3枚程度摘みます。
- ウ 陽光面の着色が進んだら、葉や枝カゲをつくらないように玉回しを行うとともに、適度な強さに葉を摘みます。必要以上の葉摘みは、逆に着色が進まないのを避けます。
- エ 着色適温は10～20℃です。残暑で最低気温が20℃を超える日が続く場合は、いくら葉を摘んでも着色が進まないのを注意してください。なお、日最高気温がおおよそ32℃以上で、果実に日焼けが発生します。
- オ 極早生品種「紅ロマン」での1回目の葉摘みは、収穫予定の10日前頃に果実に触れている葉を軽く摘み、2回目の葉摘みでは1回目の1週間後を目安に、玉回しと併せて行います。着色が容易な品種なので、最小限の葉摘みを心掛けます。早すぎる・強すぎる葉摘みは糖度が上がらない原因や日焼けの原因にもなるため注意してください。なお、例年この管理で日焼けが起きる場合には、無理に葉摘みは行わないようにします。

(3) 「紅ロマン」の日焼け対策

- ア 「紅ロマン」の日焼け対策として、気温が急激に上昇する危険のある梅雨明け後に、被覆資材（商品名：サンテ®）で果実を被覆することが有効です。果面が受ける日射量が減少し、果面温度の上昇が抑えられ、日焼け果の発生を軽減できます（写真1）。日最高気温が32℃以上の日数に比例して、日焼け果の発生割合や発生程度は大きくなる傾向があるので、週間天気予報などを活用しながら対策を講じます。
- イ 取り付けの際は、果実の肩までしっかり被い、取り外しの際は、果実が落下しないよう丁寧に行います。
- ウ なお、収穫時までサンテ®で被覆しておくと、果実の着色に影響を及ぼすので、収穫予定の数日前に取り外す作業が必須となります。



写真1 「紅ロマン」における日焼け果の症状(左)とサンテ®の被覆状況(右)

(4) 落果防止剤の散布

収穫前に落果しやすい「つがる」や「きおう」には、落果防止剤を上手に使用して落果を抑えます。使用の際は、必ずラベルの登録内容を確認してください。特に「きおう」の内部裂果で早めに熟す果実の取り扱いには、農薬の使用基準に違反しないよう厳重に注意してください。

(5) 早生種の収穫

- ア 一般に、りんごは満開後一定の日数で成熟する傾向があり、この日数は品種によってほぼ定まっています。今年の満開日から見た収穫期の目安は表2のとおりですが、これは北上市成田の満開日より算出しており、県南の平場ではこの予想日より早まることが予想されます。また、向こう1か月（7/20～8/19）の平均気温は高い予報であり（7/18、仙台管区气象台発表）、高温により着色しにくくなる可能性もあるため、過度な着色は期待せず、食味・硬度等を確認の上、適期収穫を心がけてください。

- イ すぐりもぎが基本です。特に熟期が不揃いな「つがる」や「きおう」は徹底します。
- ウ 「紅ロマン」は、着色が先行するため、食味を確かめ、香りや果汁が十分に出てから収穫してください。地色は、いくらか青みが残る程度を目安とし、果肉が白いうちに収穫します。また、果実品質を保持するため、収穫期が高温で経過する場合は、果実温度が低い朝に収穫し、できるだけ早く出荷（予冷）してください。
- エ 「きおう」は、ツル浮き（内部裂果）が発生しやすい品種で、特に降水量が多い8月に入ってから発生します。裂果したものは正常果よりも早く熟すので、特に収穫前半はツル浮き果が混入しないよう注意してください。
- オ 「つがる」は、収穫後の果肉の軟化が早く、収穫が遅れると果面に油上りが発生しやすいので、地色に注意して遅取りを避け、収穫後はできるだけ早めに予冷してください。

表2 早生種の収穫期の目安

品種	満開日 ^{※1}	収穫期 までの 満開後数	満開後日数 による 収穫予想日 ^{※2}	収穫期の果実品質の目安			
				硬度 (lbs)	糖度 (Brix%)	デンプン 指数	カラーチャート 指数 ^{※3}
紅ロマン	4月26日	100 ~ 110日	8月4日 ~ 8月14日	-	12~14	2.5~3	2.5~3
きおう	4月27日	115 ~ 125日	8月20日 ~ 8月30日	13~14	13以上	2~3	2.5~3.5
つがる	4月28日	115 ~ 125日	8月21日 ~ 8月31日	13~14	12~14	3~3.5	2~3

※1 満開日は農業研究センター(北上市成田)観測日 ※2 きおう、つがるは収穫開始予想日

※3 紅ロマン、つがるはふじ地色用、きおうはきおう表面色用を使用

(6) 「紅いわて」の収穫前管理

「紅いわて」は着色の非常に良好な品種であるため、軽い葉摘み作業でも十分に着色します。陽光面が着色した時点で果面に付着している葉を取り除き、枝カゲをつくらぬよう軽く玉まわしを行います。「紅いわて」はつるが短い傾向にあるため、玉まわしは慎重に行ってください。

(7) 夏季せん定（わい性樹）

- ア 樹勢の強い樹を対象に、8月下旬～9月上旬にかけて行います。
- イ 側枝の上面から発生している30cm以上の直上枝を間引くほか、30cm以下の新梢でも枝量と混み具合を見ながら、日光、薬剤が通る程度に適宜間引きます。
- ウ なお、過大な夏季せん定は樹勢を弱めるため、紫紋羽病の発病誘因となることがありますので、発病の恐れのあるところでの夏季せん定は最小限にとどめてください。

3 病害虫防除

- (1) 褐斑病や斑点落葉病の発生に注意し、多発が懸念される場合は速やかに特別散布を実施します。
- (2) シンクイムシ類の発生に留意し、散布間隔を空けすぎないように防除を行いましょ。
- (3) ハダニ類は、主幹近くの新梢葉（普通樹では主幹や主枝の徒長枝葉）をよく観察し、要防除水準（寄生葉率30%）に達した場合は直ちに防除を実施してください。リンゴハダニが増加傾向にあるため、7月22日付け農作物病害虫防除速報 No.10 りんご編-3（病害虫防除所発行）を参考に園地を確認し、必要に応じて防除を実施します。
- (4) 果樹カメムシ類については、園地をよく観察し、大量の飛来が確認された場合は、効果の高い薬剤により速やかに防除を実施してください。
- (5) その他の病害虫についても、病害虫防除所の発生予察情報や防除情報を参照し、園地の発生状況をよく観察して、適期防除に努めてください。
- (6) 早生品種の収穫が近づいています。薬剤散布は、農薬の使用基準（特に収穫前日数）をよく確認して、誤使用のないよう注意してください。除草剤についても同様です。

ぶどう

1 生育概況

生育診断圃（紫波町）の「キャンベルアーリー」は、開花期前後（5月下旬～6月上旬）に低温となる日があり、結実率は平年を下回りました（表3）。ただし、本診断圃以外の参考地点での「紅伊豆」、「サニールージュ」、「シャインマスカット」など、ハウス内の品種やジベレリン処理を行う品種の結実は概ね良好です。

新梢長は、平年比168%、前年比109%で、房長・果径も平年及び前年を上回っています（表3）。本年は、開花が調査開始以降最も早かったうえ、6月も気温が高く、日照時間が多かったため、新梢生育は強いものの、全体的には順調に生育しています。

なお、向こう1か月（7/20～8/19）の平均気温は高い予報であり（7/18、仙台管区気象台発表）、今後は、日焼けの発生に留意し必要に応じてカサかけを行います。

表3 ぶどう(キャンベルアーリー)の生育状況(観測地点:紫波町赤沢)

調査年次	結実率 (%)	7月15日時点での生育			
		新梢長 (cm)	節数 (葉数)	房長 (cm)	果径 (mm)
本年(R6)	34.2	215.9	17.0	15.7	18.9
平年	43.4	128.6	16.2	14.7	16.1
平年差・比	-9.2	168%	105%	107%	117%
前年(R5)	33.0	198.1	19.9	14.9	18.6
前年差・比	1.2	109%	85%	105%	102%

※平年値のうち、結実率は、平成9年から令和5年の平均値、他の数値は、昭和49年から令和5年の平均値。

2 栽培管理のポイント

(1) 摘粒の見直し

果房の形を整え、品質を向上させるため、着粒の多い密着房、裂果粒、病害虫果粒を中心に摘粒を実施します。1房当たり粒数の目安は、「キャンベルアーリー」、「ナイアガラ」が70粒程度、「サニールージュ」が50粒程度、「シャインマスカット」が40～50粒、「紅伊豆」が30～40粒、となりますので、見直しを行ってください。

(2) 摘房

果実の糖度や着色など品質を向上させ、同時に樹体の養分の消費を防いで翌年の花芽の充実を図るため、適正着房数を目標に摘房を実施します（表4）。

しかし、「キャンベルアーリー」で樹勢が弱い場合は、表4によらず1房当たりに必要な葉数（概ね15～24枚で1房、25枚以上で2房）で着房数を制限してください。

「紅伊豆」などの大粒種で、樹勢をコントロールする目的で1新梢2房としている場合でも、着色や糖度の上昇の遅れ、樹体の凍寒害発生を防ぐために、着色開始を目途に最終房数とします。

なお、日照不足などで着色遅延となり収穫が遅れると、果実品質の低下や樹体の耐凍性の低下が懸念されます。場合によっては、着房数を基準より減らして着色促進を図ることも必要です。

表4 主な品種の収量構成要素の目安

品種※1	仕立様式	新梢数※2 (本/坪)	着房数		必要な葉数	目標収量 (kg/10a)
			(房/坪)	(房/本数)		
キャンベルアーリー	短梢	20	27～30	1.35～1.5	1房:12～16枚	2200
					2房:17～22枚	
サニールージュ	短梢	19～20	16	0.8	15～18枚	1700
紅伊豆	長梢	15	10～12	0.67～0.8		1200
シャインマスカット	短梢	8		0.8		1600

※1 「サニールージュ」は暫定値

※2 「シャインマスカット」は主枝1mあたりの新梢数

(3) 新梢管理

棚面を明るくして果房の着色を向上させ、樹勢をコントロールして養分の浪費を防ぐため、勢力の強い新梢を中心に間引きや摘心を行います。硬核期以降（7月下旬以降）に実施しますが、①赤色系品種、②紫黒色系品種、③白色系品種の順に棚面を明るくします。

短梢栽培では、葉数確保のため副梢についても基部から2～3枚の葉を残して摘心していきま。しかし、混み合っている場合は適宜間引いてください。

(4) 収穫

今年の収穫は、前年同様に早まることが予想されます。着色だけではなく、糖度などの食味に留意しながら（表5）、適期収穫に努めます。収穫に当たっては、農薬使用基準の使用時期（収穫前日数）に注意してください。

収穫は、果実温度が低い早朝から午前中に行います。降雨後は、糖度も下がり、輸送中の腐敗も多くなるので避けてください。

選果・調整は、果粉を落とさないように穂柄を持ち、未熟果、腐敗果、裂果等を除き、出荷形態に即して房形を整え出荷してください。

表5 品種別収穫時期の目安

品種	基準糖度	房の状態	備考
デラウエア	18%以上	着色完了2～3日後	酸抜けが遅い、食味重視
サニールージュ	18%	房全体が紫赤色	脱粒少ない
キャンベルアーリー	14%以上	房全体が黒紫色	
紅伊豆	18%以上	房全体が鮮紅色	過熟果は軟化や脱粒が多い
シャインマスカット	18%	房全体が黄緑色	



写真2 裂果した「紅伊豆」

(5) 裂果対策

収穫直前の急激な土壌水分の変化は、裂果の発生を助長します（写真2）。土壌が乾燥し過ぎないように、土壌水分を収奪する雑草の刈り取り、樹冠下への敷きワラ等を実施します。また、降雨があった場合には、過剰な水分を早期に排水できるように、根域周辺にビニール等を敷く、溝掘り（明渠）するなどの対策を実施します。

「紅伊豆」などの雨よけハウス栽培では、温度が高くなりやすいハウス中央部などで、果実の着色不良や果肉の軟化が裂果や脱粒を誘発することがあります。気温が高くなると予想される日は、サイドのビニールを巻き上げる、換気扇を利用する等温度が上がりすぎないように努めます。

3 病虫害防除

病虫害の発生状況に応じて防除を実施しますが、収穫が間近になっているため、農薬の使用基準（収穫前日数、散布濃度、使用回数）や散布履歴を十分確認した上で防除を行ってください。

薬剤によっては、果粉の溶脱、果面の汚れなど品質を損ねることがありますので、薬剤を選択する際は注意してください。

次号は8月29日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。

農作物技術情報 第5号 畜産

発行日 令和6年7月25日
 発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
 編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
 パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆**牧草** 再生草（二番草）の収穫は刈りを避け、追肥は極力暑熱時を避けて、曇天時に行いましょう。
 草地更新を行う場合は、耕起、碎土、整地作業を丁寧に行い、良い播種床を準備しましょう。
- ◆**大家畜の暑熱対策** 輻射熱の遮断や遮光、牛体への送風と換気など牛舎環境面からの暑熱対策を徹底しましょう。また、新鮮な十分量の水と消化性の良い粗飼料や重曹の給与など、飼料給与面からの暑熱対策も実施しましょう。

1 牧草

（1）再生草の刈取り管理

再生草の刈取りは、前回の刈取りからオーチャードグラス草地で40-45日後、チモシー草地で50-55日後が目安です。刈取りは、夏枯れを防ぐため、地際から10-15cmは残すように行います。追肥量は10aあたり窒素5kg、リン酸2.5kg、カリウム5kgが標準です。追肥や尿散布は、猛暑が続いている時期に行うと肥料焼けの可能性があるので、曇天や降雨前後に行ってください。

（2）草地更新の準備

草地造成・更新してから年数が経過し、裸地化や雑草の侵入が目立ってきた場合は、草地更新が必要です。「牧草の被度」「土壌 pH および硬度」を確認し、更新方法を決定します（表1）。

表1 草地更新の目安

土 壤	牧草の被度	優良牧草の被度			
		70%以上	50-70%		50%以下
			雑草被度		
		30%以下	30%以上		
pH5.5以上 かつ 土壌硬度22mm以下	更新不要	更新検討	草地更新が必要 (簡易更新可)	草地更新が必要 (完全or簡易)	
pH5.0-5.5 または 土壌硬度22-26mm	更新検討	草地更新が必要 (簡易更新可)	草地更新が必要 (完全or簡易)	草地更新が必要 (完全更新)	
pH5.0以下 または 土壌硬度26mm以上	草地更新が必要 (完全or簡易)	草地更新が必要 (完全更新)	草地更新が必要 (完全更新)	草地更新が必要 (完全更新)	

※土壌硬度は山中式硬度計による、被度は草丈約20cmで判断（「草地管理指標」等により作成）
 土壌硬度の測定に当たっては、最寄りの農業改良普及センターへお問い合わせください。

更新作業の概要は表2のとおりです。永年生牧草は、8月中旬から9月下旬を目安に播種します。播種日から逆算して耕起、碎土、整地を丁寧に行います。土壌に問題がなく、雑草が少ない場合は、牧草の追播も増収効果があります。

表2 更新作業の概要

区分	主な作業機等	ポイント	7月			8月			9月
			上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬
完全更新		①二番草収穫後、除草剤を散布し、プラウで耕起したのち、ディスクやロータリーハローで播種床を作り播種します ②堆肥や石灰などの土壤改良材を施用します ③種子の発芽ムラや枯死を避けるため、播種後、鎮圧を行います		二番草収穫		除草剤散布	堆肥・土改材 耕起 砕土 整地	播種 施肥 鎮圧	
完全更新 除草剤播種同日処理		①一番草収穫後、予め播種床をつくり、雑草を十分生育(30~40日)させ、播種日に非選択性除草剤を散布します。除草剤散布、播種、鎮圧作業は1~2日で完了させます ②ギシギシなど永年生雑草が繁茂した草地にも有効です	除草剤散布	堆肥・土改材 耕起 砕土 整地	この期間に雑草が生育			除草剤散布 播種 施肥 鎮圧	
簡易更新 表層攪拌		①二番草収穫後、除草剤を散布し、ロータリーやディスクハローで播種床を作り、播種します ②堆肥や石灰などの土壤改良材を施用します ③種子の発芽ムラや枯死を避けるため、播種後、鎮圧を行います		二番草収穫		除草剤散布	堆肥・土改材 砕土 整地	播種 施肥 鎮圧	
簡易更新 作溝式		①二番草収穫後、牧草が短いうちに溝を切るまたは地表に穴を付けて播種します ②作溝式播種機の場合、鎮圧は不要ですが、土壌が乾燥する場合、軽く鎮圧します ③牧草のルートマットが厚い場合は、簡易更新が完全更新を選択します		二番草収穫				播種 鎮圧	
簡易更新 穿孔式									

土壤改良資材は、pH6.5 矯正量の石灰質資材と、可給態リン酸が 5-10mg/100g となるリン酸質資材が必要です。施用量は土壤分析を行ったうえで、農業改良普及センター等に相談してください。また、播種時の施肥量は、窒素 7-10、リン酸 10-15、カリ 4-7kg/10a が標準です。なお、牧草の

播種量は表3が基準となります。

表3 牧草種子の播種基準(採草地)

区分	草種	播種量 (kg/ha)	備考
オーチャードグラス主体草地	オーチャードグラス	20	①乾草利用が主体の場合は、乾燥し難いペレニアルライグラスを削除する。 ②アカクローバは、持続性に乏しく乾燥し難いことから、高タンパクな飼料の確保の場合などを除き、適宜削除する。
	ペレニアルライグラス	4	
	シロクローバ(大葉型)	2	
	計	26	
チモシー主体草地	チモシー	15	
	ペレニアルライグラス	4	
	シロクローバ(中葉型)	2	
	アカクローバ	3	
	計	24	

2 大家畜の暑熱対策

本格的な暑さが続いています。牛舎環境面（R6. 5. 30、農作物技術情報第3号及び特別号参考）と飼料給与面（R6. 6. 27、農作物技術情報第4号及び特別号参考）からの暑熱対策を徹底し、分娩前後の代謝病や繁殖障害を予防するとともに、乳牛では、乳量の減少や乳成分の低下を最小に抑えます。

(1) 牛舎環境面の対策

ア 輻射熱の反射や断熱、遮光

牛舎の屋根に当たった日光による輻射熱、牛舎に入り込む直射日光で牛舎内の温度が上昇します。屋根表面への遮熱塗料やドロマイト石灰の塗布、屋根表面への散水、屋根表面への寒冷紗の設置、屋根裏へのウレタン断熱材の吹き付け、牛舎の軒下や窓への寒冷紗の設置など、対策できることを徹底し、牛舎内をできるだけ暑くしないようにします。



写真1 屋根表面への寒冷紗の設置
※屋根と寒冷紗の間に角材等ですき間を設けると断熱効果が上がる



写真2 軒下へ寒冷紗を設置し西日を遮断
※ハウスの「くるくる」を用いて巻き上げ巻き下げができる事例

イ 送風と換気

牛舎内が30℃であっても、牛体周辺を2 m/秒の風が流れることで体感温度は21～22℃まで下がります（図1）。また、湿度が下がることで体感温度は低下します（図2）。牛体周辺、とくに頸から肩にかけてしっかり風が流れること、湿った牛舎内の空気をしっかり換気することが大切です。

牛の呼吸数が多い、横臥時間が少ないなどの牛の行動が観察される場合は、換気扇を増やす、吊り下げ換気扇の角度を60度から45度の範囲でやや小さくすることで牛体周辺の風速を増や

します。また、分娩前後や乳量の多い牛、体調を崩した牛には、個別に扇風機で積極的に送風することも体感温度を下げるのに有効です。

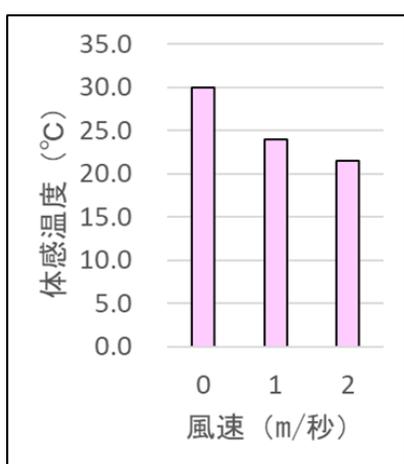


図1 気温 30°C時の風速と牛の体感温度

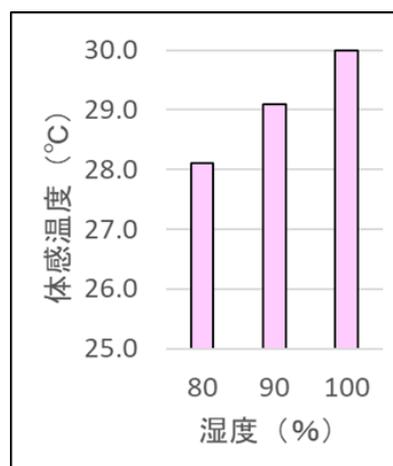


図2 気温 30°C時の湿度と牛の体感温度
(デーリイマン「牛と人に優しい牛舎づくり」より引用)

ウ 給水施設の整備

飲水量の確保も大切です。十分な飲水量を確保するため、配管を太くすることや、ウォーターカップの改修も検討してください。また、水槽のこまめな清掃も飲水量確保に必須です。

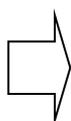


写真3
配管を太くすることで一度に十分な水量を供給できます。

(2) 飼料給与面の対策 (乳牛)

ア 水

泌乳牛、乾乳牛ともに気温の上昇に伴い飲水量が増えるので、清潔な水を常に飲めることが大切です。水槽やウォーターカップの掃除をこまめに行います。

イ 粗飼料

繊維含量が少なく粒度の小さい粗飼料は、ルーメンにとどまる時間が比較的短く、逆に繊維含量が多く粒度の大きい粗飼料は、滞留時間が長くなります。ルーメンに滞留する時間が長いほど発酵熱が増加するので、前者の様な消化性の良い粗飼料の給与が必要です。

TDNが高く、CPと繊維を適度に含む「適期刈の一番草」で雨に当たらなかったものが最良です。特に、乾乳後期から泌乳最盛期の牛には優先的に給与します。

そのほか、調製品質の良い三番草や良く食べる輸入乾草があれば、それらも併せて給与を組み立てます。また、トウモロコシサイレージの貯蔵量に余裕があれば、給与量を少し増やすことも暑熱対策に有効です。

ウ 重曹、ミネラル、ビタミン給与

飼料の採食量と反芻が減ることで、ルーメンへの唾液流入量が減少します。また、呼吸数の増加に伴い唾液中の重炭酸イオンの含量が減少します。このため、泌乳量が多く配合飼料の給与量の多い牛ほどルーメンアシドーシスのリスクが高くなります。ルーメン pHの低下を緩和するため、重曹入りの鉱塩を置く、重曹入りのペレット給与、配合飼料への重曹の添加(目安 100~200g/日・頭)などを対策します。放し飼いの場合は、TMRへ添加するほか、飼槽の一角に自由に摂取できるスペースを設けます。なお、低カルシウム血症、乳房浮腫を誘発する恐

れがあるので、乾乳牛には重曹給与は行いません。

また、発汗等によりカルシウム、リン、マグネシウムの要求量も増加するので、乾乳後期牛を除き、通常の1～2割増しで与えます。さらに、暑熱時の体温上昇で酸化ストレスが増加すると言われており、ビタミンEやセレンなどの抗酸化添加剤の補強も検討します。

エ 給餌方法

(ア) 涼しい時間帯（朝、夕方から夜間）の給餌量を増やします。

(イ) 分離給与では、粗飼料を食い切るのを確認してから配合飼料を給与します。給餌回数を増やし、1回の配合飼料の給餌量を減らします。牧草の摂取量を増やすため、牧草を細断して給与できれば理想的です。

(ウ) TMR 給与では、選び食い防止のため、粒度が粗くないこと、水分を含んでいること（50%前後）を確認します。必要に応じて好気的変敗を緩和する添加剤を使用します。また、エサ押し回数を増やすことで、採食量を維持するとともに固め食いを緩和します。

次号は8月29日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

熱中症防止

- 日中の気温の高い時間帯を外して作業を行うとともに、休憩をこまめにとり、作業時間を短くする等作業時間の工夫を行うこと。水分をこまめに摂取し、汗で失われた水分を十分に補給すること。気温が著しく高くなりやすいハウス等の施設内での作業中については、特に注意。
- 帽子の着用や、汗を発散しやすい服装をすること。作業場所には日よけを設ける等できるだけ日陰で作業するように努めること。
- 暑い環境で体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断するとともに、涼しい環境へ避難し、水分や塩分を補給すること。意識がない場合や自力で水が飲めない場合、応急処置を行っても良くならない場合は、直ちに病院で手当を受けること。

**6月1日～8月31日は
農薬危害防止運動期間です**

- 近隣住民・周辺環境に配慮しましょう
- 農薬散布準備、作業中・後の事故に注意しましょう
- 農薬の保管・管理は適切にしましょう

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。